

Title	在日韓国・朝鮮人における地域社会と民族的アイデンティティ : 点在地域の子どもたちのアイデンティティ状況を中心として
Author(s)	金, 泰泳
Citation	大阪大学教育学年報. 1 p.187-p.199
Issue Date	1996-03
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12085
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

在日韓国・朝鮮人における地域社会と民族的アイデンティティ — 点在地域の子どもたちのアイデンティティ状況を中心として —

金 泰 泳

【要旨】

在日韓国・朝鮮人の紹介は、主として民族的異質性が顕在化している集住地域・エスニック・コミュニティに焦点が当てられてきた。しかし在日韓国・朝鮮人の多くは日本社会に点在する形で生活をしている。そして彼らは民族性を表明することなく、潜在的な存在であるために状況が把握しがたく、顧みられることが少なかった。本稿では筆者の住み込み調査、参与観察、また外国人教育研究機関が行った調査データの分析による集住地域との比較をとおして、「点在地域」の在日韓国・朝鮮人の子どもたちのアイデンティティ状況に焦点を当て、その特質を明らかにすることを試みたものである。その結果彼らのアイデンティティは、日本社会への「同化」といった形で一元的には説明づけることのできない、多様な形相を示すものであり、「非自明性」「マージナル・マン性」の不安定さと可能性をあわせ持つものであると考えられる。従来、在日韓国・朝鮮人の民族的アイデンティティは、「共通の祖先」「同一文化」といった、いわば原初的特性に基づく定義が前提にされてきたが、今後、点在地域に顕著に見られるような、「非自明性」あるいは「マージナル・マン性」に着目し、積極的な意義づけを行っていくことが必要であると考えられる。

1. 序

外国人労働者の定住化が進むなかで、日本社会の国際化が問題とされ、日本人は異民族とどのような民族関係を結ぶのかという議論が浮上してきた。そうした問題に直面する中で、日本社会最大のエスニック・マイノリティ集団である在日韓国・朝鮮人の存在があらためて注目を集めるようになった。しかしその視線は常に在日韓国・朝鮮人の集住地域あるいはエスニック・コミュニティに注がれてきた。集住地域あるいはエスニック・コミュニティは、在日韓国・朝鮮人の存在が顕在化しており、日本社会との異質性も鮮明に見て取ることができるからであり、異民族の共存の現実・課題・可能性を見ることができるからである。

歴史的・経済的・社会的要因によって異質な社会で生活をはじめめるマイノリティ集団は、ホスト社会からのさまざまな圧力に対する防衛手段として「集住」という居住形態を取る傾向にある。しかし定住化傾向とそれに伴う集団内の階層分化が進む中で、構成員のエスニック・コミュニティからの離脱・分散の傾向が生まれ、ホスト社会に点在し、地域社会に融合する形で生活をする者が増加していく。こうした傾向はいわゆる「ニューカマー」の外国人についても、また在日韓国・朝鮮人の場合も例外ではない。生活環境の変更は、どのような集団にあるいはどのような価値観にアイデンティティを求めるのかということの「移行」あるいは「変容」と見ることができるであろう。日本の地域社会に点在して生活する在日韓国・朝鮮人の状況は、これまであまり顧みられては来なかった。それは、彼らの多くが地域社会において、自分が韓国・朝鮮人であることを

表明していないか、あるいは意識的に隠しているという状況が存在するからである。彼らは在日韓国・朝鮮人の中でも潜在的な存在であり、いわばマイノリティ内のマイノリティといえることができるかもしれない。それだけに彼らの存在は、在日韓国・朝鮮人の現状を、ある意味ではより象徴的に表わすものである、といえることができるであろう。

本稿では、そうした点に生活する在日韓国・朝鮮人の、主として子どもたちのアイデンティティ状況を、集住地域あるいはエスニック・コミュニティの状況との比較において明らかにすることを試みる。まず集住地域・エスニック・コミュニティと点在地域、それぞれの在日韓国・朝鮮人の状況を、大阪市生野区と大阪府守口市の場合を例にとり、筆者が行った住み込み調査、参与観察あるいは教師からの聞き取り調査をもとに明らかにする。その上で、両地域の在日韓国・朝鮮人の子どもたちの意識、彼らを取り巻く環境について、大阪人権研究会・大阪市外国人教育研究協議会と守口市在日外国人教育研究協議会（以下、守口市外教と略）が行った質問紙調査の結果をもとに、その違いを明らかにする。そして参与観察等による点在地域の在日韓国・朝鮮人生徒のアイデンティティ状況を浮き彫りにし、その問題点と可能性を明らかにしていく。

2. 地域による民族的アイデンティティの違い

(1) エスニック・コミュニティの生態学的特徴

〈民族的同質性〉

大阪市生野区は区民約16万人のうち約25%、4人に1人を韓国・朝鮮人が占める町である。筆者は1982年から1985年まで、この生野区で生活をした体験を持つ。こうした生野区の状況を谷(1993)は、「ルイ・ワースの『都市』の生態学的定義(量、密度、異質性という人口構成の三要因による)がもっともよく当てはまる、日本一のエスニック・コミュニティ」(1)と表現している。生野区の中でも猪飼野地区は韓国・朝鮮人がとくに多く集住する地域であり、一説には50%を韓国・朝鮮人が占めると言われている。その猪飼野地区を歩けば、韓国・朝鮮名の表札が多く目に入る。しかしほとんどの人々が韓国・朝鮮名を使っているというわけではなく、日本名を使って生活している人も多い。それはだれが韓国・朝鮮人であるかということは互いに知り合っており、韓国・朝鮮名を使うということが必ずしも在日韓国・朝鮮人であることを表明しているか否かの絶対的な指標とはなっていないからである。

この地域には韓国・朝鮮の文化が豊富に存在している。地域には通称「朝鮮市場」と呼ばれる商店街があり、韓国・朝鮮の食料品や民族衣装や民族葬祭具などが売られている。韓国・朝鮮人にとって祖先の霊を供養する「チェサ」(法事)はたいへん重要な位置を占めており、公的な仕事を休む場合でも「法事だから」という理由は他の人々を納得させるに足るものである。それが多くの家庭でそうであるから、互いにその重要さを了解しているのだ。チェサのやり方はどの家庭でも共通するところが多いが、その家庭によって独自の部分もある。鐘やシンバルのような打楽器を激しく鳴らしながら「霊を呼び招いたり」、また「巫女」を招いて祖先の霊の意思を語らしめたりもする。どこからともなく荒々しい鐘の音がきこえてきて、「ああ、どこかで法事をやっているのだなあ」、「ああ今日はチュソ(中秋)なのだなあ」ということを知る、ということも稀なことではない。こうした風習の継承は、韓国から来日してきている韓国人をして、韓国では既

に廃れているようなことでも厳格に受け継がれている、と言わしめるほどである。また韓国・朝鮮人どうしの兄弟づき合いや親戚づき合い、また知人どうしのつき合いの密度も濃い。そうしたコミュニケーションの中で、結婚相手の仲介や「頼母子講」的な互助会もさかんである。そうした緊密な人間関係の中で、たとえば知人に対して、本国にいる自分の親類を結婚相手として紹介するといったこともよくある。集住地区においてはそうした「情報」が豊富であり、本国から結婚相手を招く場合も少なくない。

〈キンシップとフィクティブ・キンシップ〉

そうしたエスニック・コミュニティにおける在日韓国・朝鮮人の「もっとも基本的かつ重要な結合関係」を谷は親族関係に求め、それを視覚的に確認できる指標として「チェサ」をあげている(2)。「チェサ」は大抵その親族の長男の家で行われる。そして多くの場合、長男は親の扶養の義務を負っており、彼らは両親が昔から生活をしてきたエスニック・コミュニティに居を構えている場合が多い。また周辺地域に居を構えていても、チェサの際には両親の家に来るという習慣がある。エスニック・コミュニティはこのように、親族ネットワークの交流が濃密に繰り広げられる場である。こうした民族としての原初的・伝統的な親族ネットワークが在日韓国・朝鮮人社会の拠り所となっている一方で、「在日」独自の歴史性による共属意識が考えられる。それはフォーダムとオグブが指摘した「フィクティブ・キンシップ」の感覚である。フィクティブ・キンシップ(Fictive Kinship)は人類学の用語であり「擬似的親族」と訳される。それは血縁や結婚によらない架空の親族関係に基づく社会的・経済的な互惠関係を意味する。フォーダムとオグブはこのフィクティブ・キンシップを、アメリカにおける黒人コミュニティの特徴としてあげている(3)。

・・・ブラックアメリカンは互いを「親戚」のような関係としてみなす。この仲間意識、あるいは集団的社会的アイデンティティは、黒人がお互いを、多くの親戚あるいは仮の親戚といった類の用語であらわしていることにはっきり見て取ることができる。「兄弟」「姉妹」「魂の兄弟」「魂の姉妹」「血統」「家族」「仲間」「親類」「同胞」といった言葉は、青年やおとなによってごく頻繁に使われているものである。

フィクティブ・キンシップは奴隷時代あるいはその後の時代の、白人による搾取と黒人集団に対するステレオタイプ化をとおして、白人のアイデンティティに対抗するかたちで集団的アイデンティティ感覚が形成されてきたものであり、白人のアイデンティティに対抗する黒人の仲間意識や白人に対する境界の維持の行為や態度による結束を象徴するものである。

こうしたフィクティブ・キンシップを窺わせる状況は在日韓国・朝鮮人の生活世界でも頻繁にみられる。在日韓国・朝鮮人が互いを「同胞」と呼ぶことはよく知られていることである。また在日1世・2世のあいだでは血縁関係にはない、ごく親しい友人や年長、年下の人のことを「にいさん・ねえさん」と呼び合う習慣がある。そしてこの習慣は3世の若い世代のあいだにも引き継がれている。筆者が、猪飼野地区を中心に在日韓国・朝鮮人の教育活動を行っているグループの事務所に見学に行った折、メンバーのあいだでは「にいさん・ねえさん」という意味の韓国・朝

鮮語である「 OPPA・ ONNI」といった呼称がごく日常的に使われていた。在日韓国・朝鮮人は「共通の祖先」あるいは「共通の歴史的体験」に根ざした集団的社会的アイデンティティを形成してきたのである。そしてそうした意識は、量・密度・異質性の高いエスニック・コミュニティにおいて鮮明にみられる。生野区では年に一度、韓国・朝鮮の芸能や料理を披露し合う「民族文化祭」が催されている。この文化祭について谷は、「猪飼野の在日の結束力を内外に誇示することによって・・・諸活動の実効力を上げる、『構成された民族性』という機能的側面」もあると述べており(4)、そこにはフィクティブ・キンシップの意識を彷彿とさせるものがある。

こうした高い民族的同質性と共属意識の濃密な環境の中で、集住地域・エスニック・コミュニティの在日韓国・朝鮮人の子どもは、点在地域の子どもの比べて日本社会における民族的異質性を、感じる事が少ない状況にあり、韓国・朝鮮人であるということ、いわば自明のこととして受け止める傾向が強いと考えられる。猪飼野地区のある中学校の教師は、「生徒たちにとっては、点在地域の子どもたちにはありがちな『民族性を隠す』という行為がかえって不自然なことなんです」と述べており、集住地域の子どもの民族的アイデンティティの状況がうかがえる。

(2) 点在地域の在日韓国・朝鮮人の生態学的特徴

〈社会移動としての点在〉

守口市は、大阪市の韓国・朝鮮人集住地域に隣接する人口157,000人の市であり、全人口のうち2,500人、1.6%が韓国・朝鮮人である(1995年11月末現在)。筆者は1993年度の1年間、守口市のある中学校に設置されている「民族学級」の講師を務め、同市における在日韓国・朝鮮人教育の取り組みに関わった。

守口市の中にもかつて鉄道の敷設工事への徴用によって韓国・朝鮮人が集住して生活する地域があった。しかし定住が進む中での経済的安定やあるいは世代交代によって分散化し、現在では集住の形態をとどめておらず、人々は日本の地域社会の中に点在する形で生活をしている。

教師からの聞き取りによると、同市の在日韓国・朝鮮人の中には、大阪市の在日韓国・朝鮮人の集住地域である生野区で生まれ育ち、成人をして結婚する際に、生野区を離れその周辺部に位置する守口市に居を構えたという人々も多いという。また生野区で事業所を経営し職住一体の生活をしてきたが、経済的に安定してきた結果、住居だけを守口市に住居を移したという人もいる。こうしたことから守口市で生活する在日韓国・朝鮮人の多くは、社会移動を果たしてきた人々であるということができ、集住地域・エスニック・コミュニティで生活する在日韓国・朝鮮人に比べて相対的に、経済的に安定している家庭が多く、また年齢層も低いという特徴があげられる。

〈点在地域における民族的パッシング〉

守口市の在日韓国・朝鮮人の多くは地域社会の中で、自分が韓国・朝鮮人であることを表明していないか、あるいは意識的に隠して生活をしている。教師の言葉を借りれば彼らには「日本人のようにきちんとさせる」という考え方が強く、そして実際に日本国籍の取得、いわゆる「帰化」をしていく者も多いという。そのため、彼らは韓国・朝鮮人どうしのつながりを持つことには消極的あるいは否定的であり、もっぱら地域社会に融合することを志向している。守口市には、在日韓国・朝鮮人の権益獲得運動の取り組みを積極的に行っている人々も少数ながらいるが、しか

しその運動も広がりを持つには至っていない。また守口市では年に2回、在日韓国・朝鮮人児童生徒を対象に、民族文化を学ぶ場がもたれているが、教師たちの熱心な誘いにも関わらず参加者数は必ずしも多くない状況である。

集住地域やエスニック・コミュニティからの社会移動はそれ自体がアイデンティティの表出的側面を持つ。つまり、集住地域・エスニック・コミュニティにおける韓国・朝鮮人社会の環境・レヴィンはそれを“アト・ホームな雰囲気”と表現しているが(5) — ではない日本人社会の生活環境・生活様式の意識的な選択であり、韓国・朝鮮人のネットワークではなく、ホスト社会にアイデンティファイしていこうとする意志の表われであると言えるのである。こうした状況をデヴォスは“良き隣人”を求めて郊外へと移り住み順応しようとする「階級的・民族的パッシング」と表現した(6)。点在地域の人々は、日本社会への参入をとおして階層移動を果たそうとし、またその意図は彼らの状況をみるかぎり一定の成功をおさめているということができるであろう。しかしそうしたパッシングは一方で、「中流階級に含まれたいという望みは、初めての生活環境の中で彼らをしばしば不安定にする」ものであり(7)、日常的な緊張を強いられるものであるということができる。

点在地域の子どもは、集住地域の子どもに比べて周囲の日本人社会との民族的異質性を強く感じ、緊張感をその内面に抱えながら生活を送っていると考えられる。先ほどの猪飼野地区の中学校の教師は、点在地域の前任校における状況を、「前の学校は少数校だったので、生徒たちは韓国・朝鮮人であることを隠していました。韓国・朝鮮人であることに對して前向きになるように指導していましたが、明らかにするまでの道のりがどれだけ長かったことか・・・」と述べている。また子どもたちはそうした葛藤・緊張を抱え、なおかつ韓国・朝鮮人どうしのネットワークが乏しいために一人一人が孤立した状態にあり、その思いを共有しにくい状況にあるということができる。

〈子どもの意識と環境の違い〉

守口市在日外国人教育研究協議会は1993年11月、市内の小学校5年生・6年生、中学校1年生・2年生の在日韓国・朝鮮人と日本人の児童・生徒を対象に、その生活環境や意識の調査を行った。またそれに先立つ1990年の2月～3月、大阪人権研究会と大阪市外国人教育研究協議会は大阪市内の在日韓国・朝鮮人と日本人の児童・生徒を対象に教育環境や意識の調査を行った(8)。大阪市の調査対象者のうち約80%は在日韓国・朝鮮人が多く居住する生野区・東成区の子どもたちであり、この調査にはエスニック・コミュニティや周辺の集住地域の在日韓国・朝鮮人の子どもたちの状況が反映されているということができる。

筆者は守口市の調査に携わり調査結果の分析等を行った。二つの調査の質問項目には共通するものがあり、表1から12はそれらのデータをもとに作成したものである。

表1 調査結果の対照表

a) あなたの家族の人は人形や置物をかざっていますか。	b) あなたの家では韓国朝鮮の服を着ますか。(着ない割合)
守口市 (N=75) 大阪市 (N=1476)	守口市 大阪市
1. たくさんある } 19.7	1. 着ない 52.0 42.2
2. 少しはある } 41.3 55.0	
3. ほとんどない 40.0 24.1	
4. わからない 18.7 -	
c) あなたは祖先のためのお祭りや法事に参加したことがありますか。	d) あなたは韓国朝鮮に行ったことがありますか。
守口市 大阪市	守口市 大阪市
1. 参加したことがある 82.7 94.5	1. 行ったことがある 21.3 31.7
2. 参加したことはない 16.0 5.1	2. 行ったことはない 76.0 66.9
e) あなたは自分が韓国朝鮮人だということをいつごろ知りましたか。	f) 自分が韓国朝鮮人だということをどのように知りましたか。
守口市 大阪市	守口市 大阪市
1. 小学校に入学する前 17.3 32.7	1. 両親から 65.3 54.5
2. 小学校1～3年のあいだ 45.3 36.9	2. その他の家族から 5.3 2.1
3. 小学校4年～6年のあいだ 24.0 19.1	3. 近所の人から 0.0 0.1
4. 中学生になって 0.0 1.7	4. 友だちから 0.0 0.4
5. わからない 13.3 9.7	5. 学校の先生から 8.0 5.2
	6. その他 0.0 1.5
	7. 何となくわかった 10.7 27.4
	8. わからない 8.0 7.0
g) あなたは学校や近所で仲よくしている韓国朝鮮人の友達がいいますか。	h) あなたは学校で本名をつかっていますか、通名(日本名)をつかっていますか。
守口市 大阪市	守口市 大阪市
1. たくさんいる 16.2 41.0	1. 本名 9.3 23.7
2. 2～3人いる 45.9 38.6	2. 通名 90.7 75.6
3. いない 36.5 18.3	
i) 本名を名のっていいやな思いをしたことがありますか。(本名をつかっている子どものみ)	j) あなたは自分の本名を知っていますか。(通名をつかっている子どものみ)
守口市 (N=7) 大阪市 (N=350)	守口市 (N=68) 大阪市 (N=185)
1. ある 57.1 24.4	1. 知っている 74.7 93.9
2. ない 14.3 70.3	2. 知らない 13.3 5.2
k) あなたは本名を名のりたいですか。(通名をつかっている子どものみ)	l) あなたが韓国朝鮮人であることを学校の友だちは知っていますか。(通名をつかっている子どものみ)
守口市 大阪市	守口市 大阪市
1. 名のりたい 6.7 9.1	1. 知っている 33.8 69.1
2. 名のりたくない 61.3 48.2	2. 親しい人だけ知っている 20.3 13.7
3. まよっている 1.3 37.6	3. 知らない 14.9 1.4
4. わからない 17.3 0.0	4. わからない 19.0 14.1

以上の結果から点在地域と集住地域の子どもの環境や意識にはどのような違いが見られるであろうか。集住地域の子どもは民族文化に触れる機会が多く、点在地域の子どもは相対的に少ない。そのことが影響していると考えられるが、韓国・朝鮮人であることの認知時期も集住地域の子どもが早く、点在地域の子どもは相対的に遅い。そしてこうした状況は認知経路において集住地域の子どもに「何となく知った」という答えが多いことにも表われている。在日韓国・朝鮮人の友人の数も集住地域の子どもに多く、点在地域の子どもは少ない傾向にある。また韓国・朝鮮名を名のって生活する子どもも集住地域に多い。しかし逆に韓国・朝鮮名を名のっていることで嫌な思いをした体験は点在地域に多い。こうした状況を反映して、通名を名のっている子どもに対して韓国・朝鮮名を名のってみたいかという質問に対しては、集住地域では「まよっている」子どもが多いが、点在地域でははっきり名のりたくないと答える子どもが多い。また周囲の日本人の友人が、韓国・朝鮮人であることを知っているかどうかの質問に対しては、集住地域では「知っている」「親しい人だけ知っている」をあわせて80%以上に達するのに対して、点在地域では50%程度にとどまっている。守口市の調査の回答者は、年に2度催される民族文化を学ぶ場の参加者を中心とした、比較的韓国・朝鮮文化に触れることに対して積極的な子ども層であることから、周囲への民族性の表明度をふくめて民族的環境や意識は、守口市内の在日韓国・朝鮮人児童生徒全体の割合ではより低くなるであろうことが予想される。

これらのことからも点在地域の子どもたちの周囲には民族文化的環境が少なく、また周囲が日本人社会であるという状況で、自らの民族的な異質性に敏感にならざるをえず、しかしそのことを共有する存在もまた少ないために、内面的に孤立した状況にあることがうかがえるのである。

3. 点在地域の子どものアイデンティティ状況

(1) 民族学級における参与観察から

ここまで、地域による環境や意識の違いを明らかにしてきた。先にも述べたように、筆者は1993年度の1年間、守口市の中学校に設置されている「民族学級」の講師として、在日韓国・朝鮮人生徒に関わる機会を得た。表面的には日本人生徒の中にいわば埋没する形で学校生活を送る韓国・朝鮮人生徒ではあるが、「民族学級」という場をとおして彼らと接する中で、彼らの状況を一元的に「同化傾向」とは特徴づけることができないことが見えてくるのである。そうした生徒たちの多様な状況を参与観察をとおしてを明らかにしよう。

はじめに「民族学級」の説明を簡単に述べる。「民族学級」は主として公立の小学校や中学校の放課後に、韓国・朝鮮人生徒が韓国・朝鮮の民族文化を学習する場であり、大阪、京都、兵庫を中心に行われているものである。筆者が講師を務めた学校では週に一度そうした場がもたれており、一応韓国・朝鮮人生徒の全員参加がたてまえであるが、実際には参加する生徒もいれば参加しない生徒もいる。この学校には当時、全校生徒約300人のうち20数人の韓国・朝鮮人生徒が在籍していた。各クラスには1人ないしは2人の韓国・朝鮮人生徒がいたが、韓国・朝鮮人生徒の在籍していない学年やクラスもあった。こうした状況で韓国・朝鮮人生徒のみが集まる民族学級に参加することはたいへん目立ちやすいものであり、生徒たちにとっては民族学級への参加が自らの民族性の周囲への表明という意味をも持つ。先にも述べたように点在地域の韓国・朝鮮

人は自らの民族性を周囲には隠していることが多く、また韓国・朝鮮人生徒どうしても、お互いを同じ民族の生徒だと知らないことが多い。こうした状況から民族学級への参加は生徒たちにとって少なからぬ葛藤を伴うものである。集住地域の学校の中には韓国・朝鮮人生徒の在籍率が約7割を占める学校もあり、民族学級に参加する子どもはけっして「少数派」ではない。しかし点在地域の生徒の状況は集住地域の状況とは対照的なものである。約20名の在日韓国・朝鮮人生徒のうち、民族学級に参加するか否かの態度も生徒によって異なる。毎週参加する生徒もいれば、参加を強く拒絶する生徒もいた。彼らの民族的な自己意識（肯定的か否定的か）、また学力状況やそれに反映されるどころの彼らの自尊感情について見ていくと、生徒たちをいくつかのグループに分けることができる。以下にそうしたグループの典型に近い生徒の例を上げよう。

K（男子1年生）

日本名使用。韓国・朝鮮人であることを自分からあえて表明しようとはしないが、しかし隠すということもしない。民族学級はひとつの義務だと考えており毎回必ず参加している。Kは学力も高く、教師いわく「自分自身に対して自信をもっている」生徒である。Kの自らの民族性の周囲への表明の姿勢は親のそれを反映している。Kの親も地域社会において韓国・朝鮮人であることを、隠そうとはしないがあえてアピールもしないという姿勢である。Kの親はPTA活動にも積極的であり、役員もしている。子どもたちには、韓国・朝鮮人であることの自覚を持たせるが、そのことを第一に考える生き方をさせようとはしていないとすることができるであろう。

T（男子1年生）

日本名使用。韓国・朝鮮人であるということを周囲の友人たちに知られるのをたいへんいやがっている。その姿勢から韓国・朝鮮の文化に対しても、韓国・朝鮮人であるということに対しても否定的な考え方をもっていることがうかがえる。民族学級への参加も消極的あるいは拒絶的である。またTには日常生活における反学校的な行動が目立つ。学力的には、教師いわく「やればできる子だし、頭はいいとおもう」が現状はけっして高くない。Tはしばしば否定的な自己評価や投げやりな言動を口にする。Tの親は韓国・朝鮮人であることを地域社会において隠して生活している。

S（女子3年生）

日本名使用。韓国・朝鮮人であるということを、周囲の友人に知られることをいやがり隠している。民族学級への参加も完全に拒否をしており、その姿勢から韓国・朝鮮の文化や韓国・朝鮮人であるということに対して否定的な考え方をもっていることがうかがえる。彼女は、「日本人のように」あるいは「日本人として」生きるという考え方を持っており、言動にも頻繁にそうした言葉が出てくる。Sのこうした姿勢もやはり親の考え方を反映しており、親は一家の「帰化」を考えている。Sの家庭は数年前に大阪市の生野区から移り住んできた一家であり、現在の地域社会において韓国・朝鮮人であることは隠して生活している。Sは学力は高く、クラブ活動にも熱心に参加している。

N (男子1年生)

日本名使用。韓国・朝鮮人であるということを周囲の友人に対して隠すわけではないが、積極的に表明もしない。Nは民族的な遊戯や民族楽器の演奏、また民族衣装を身につけての民族舞踊が好きで、日本人の友人の前で披露することに躊躇はしていない。Nは在日1世の祖母と同居しており、日常生活の中で韓国・朝鮮の言語や生活習慣にふれる機会が多い生徒である。Nの学力は困難な状況にあり、またリーダー格の生徒に追随するかあるいはふりまわされる傾向にある。

彼らの状況からわかることは、自らの民族性に対する肯定的・否定的の自己評価と彼らの自尊感情はかならずしも一致していないということであり、彼らがアイデンティファイするものがかならずしも「民族」に限られるのではないことがうかがえるのである。

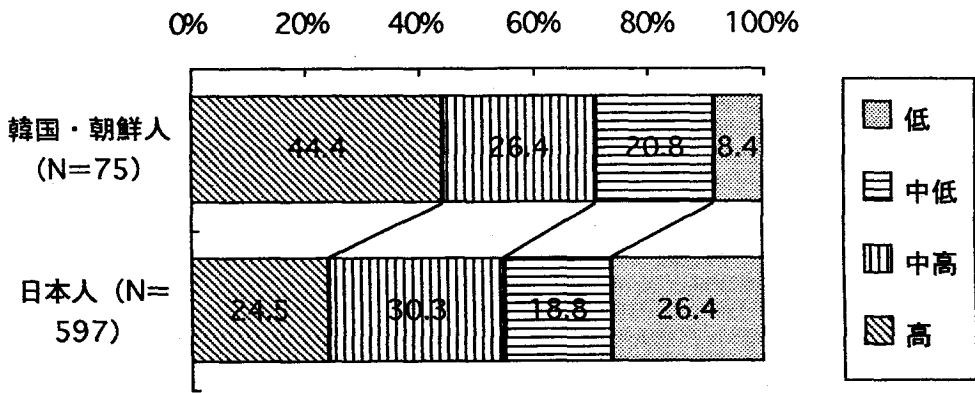


図1 守口市 児童生徒の自尊感情レベル

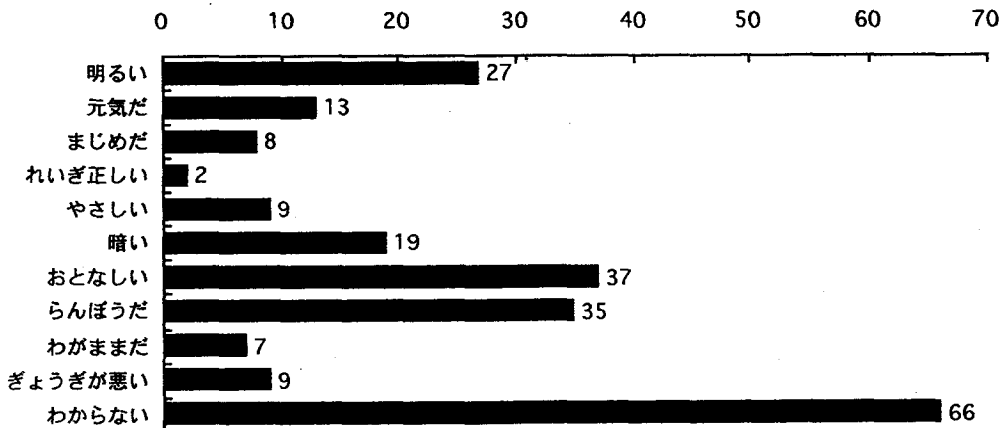


図2 守口市 在日韓国・朝鮮人児童生徒の「在日韓国・朝鮮人」に対するイメージ (N=75 複数回答 単位:人)

(2) 点在地域の子どもたちの自己概念

それでは民族性に対する自己評価と自尊感情は、守口市の他の子どもたちについてみてみるとどのような状況にあるのであろうか。図1は、守口市の在日韓国・朝鮮人児童生徒と、日本人児童生徒についてその自尊感情(9)の状況を比較したものである。

社会的マイノリティの立場におかれている子どもたちは多くの場合、低い自尊感情を示す傾向にあるが、図1をみるかぎり守口市の在日韓国・朝鮮人児童生徒のそれはマジョリティである日本人生徒のそれに比べて低いとは言えない。

また図2は子どもたち自身に、在日韓国・朝鮮人のイメージをたずねたものである

否定的イメージを選択している子どもが相対的に多いが肯定的イメージを選択している子どもも相当数いる。また「わからない」を選択している子どもがたいへん多く、彼らの民族的自己イメージが、彼ら自身にとっても捉えにくい曖昧模糊としたものであるということを表わしていると考えられる。

4. 地域社会と民族的アイデンティティの特質—まとめにかえて—

エスニック・コミュニティと点在地域では民族的アイデンティティの特徴に異なる傾向がみられた。エスニック・コミュニティにおける在日韓国・朝鮮人の子どもたちの民族的環境は、生まれた時から既に身のまわりに存在しているものであり、韓国・朝鮮人であることは、物心がつくころから自然のこととして受け止められている、自明性の高いものであるとすることができる。こうした民族的アイデンティティの指標は、「共通の祖先」「同一文化」「宗教」「人種」「言語」といった「成員間で共有されている客観的な文化的属性群を基準としたもの」である(10)。これは李が「エスニシティ」の定義と解釈を整理する試みにおいて「原初的特性に照準した定義」の基準としてあげたものである。そしてエスニシティの原初的特性に照準した定義とは、「本質的に原初的であり、ひとたび獲得・形成されたエスニック・アイデンティティは終生変わることがなく、次の世代へと受け継がれると考えられるもの」である(11)。スチュアート・ホールはこうしたアイデンティティを「啓蒙的エスニシティ」と名付け、それを「場所や時間や文化を超えて最初から存在し、本質視された過去に位置づけられる固定的、本質的、永続的なもの」と説明している(12)。エスニック・コミュニティにおける状況は、こうした「原初的特性に基づく民族的アイデンティティ」あるいは「啓蒙的エスニシティ」が育成されやすい環境であるということができるであろう。一方、点在地域においては子どもたちのまわりに民族的な環境はごくわずかなものであり、それは多くの場合、家庭内に限られている。韓国・朝鮮人社会との接触も、年に数度の祭事における親族関係に限られがちである。

ブラウは社会移動を果たした人々を、到達した階層ともとの階層のどちらの集団とも異なった生活スタイルを持った存在であり、社会的に統合されることの少ないマージナル・マンであると位置づけた(13)。点在地域の在日韓国・朝鮮人はいわば階層的・民族的なマージナル・マンである、ということができるであろう。パークはマージナル・マンを、「二つの相異なる民族の文化生活と伝統の中に、両者に緊密に関与しつつ生きている文化的雑種であり、かれの過去や伝統と縁を切ることが許されていても、みずから進んでそうしようとはせず、新たに自分の場所をみ

つけなければならない新しい社会の中にも、人種的偏見のために十全には受け容れられない人間であると定義づけた(14)。自らのマージナリティを強く意識する状況にある点在地域の在日韓国・朝鮮人にとって民族的アイデンティティは自明的なものではなく、説明と定義を必要とするものである。またそれは「既成のいかなる文化にも十全には帰属していない」(15)のものであるがために、実体を持ちにくい、抽象的で曖昧模糊としたものであり、「内実」を作り上げて行かなければならない性質を持つものということができるであろう。こうしたアイデンティティは葛藤や精神的な不安定を伴う危険性と同時に、創造性という可能性もあわせ持つものなのである。

これまで在日韓国・朝鮮人の民族的アイデンティティは、「原初的特性に照準した定義」を前提として語られてきた。そしてそうしたアイデンティティ観は、在日韓国・朝鮮人を「本来保持されているべきものが欠落した存在」と捉えることになってきた。しかしその見方からは「在日であること」の積極的な存在理由は見出しがたいのである。在日韓国・朝鮮人のアイデンティティとは何かということを探求していく上で、点在地域において顕著にみられる民族的アイデンティティの「非自明性」あるいは「マージナリティ」に目を向けていくことが、現在、要請されているのではないだろうか。

注

- 1) 谷 1993 9頁
- 2) 谷 1992 272頁
- 3) Fordham, Signithia. and Ogbu, John. U. 1986 pp.133-184
- 4) 谷 1992 272頁
- 5) Lewin, Kurt 訳書 1954 202頁
- 6) DeVos, George A. Marcelo Suarez-Orozco 1990 pp.253
- 7) Ibid., pp.253
- 8) 大阪人権研究会・大阪市外国人教育研究協議会 1991
- 9) 「自尊感情」をここでは「自分自身に対して誇りをもったり、自分は価値ある人間だと感じる気持ち」として用いている(泉南市教育委員会 1993 55頁)。守口市の調査では子どもたちの自尊感情の調査も行なわれた。子どもたちの自尊感情の度合は、「学校の勉強には自信をもっている」「自分の性格でいやだとおもうところが多い」など二十四の質問項目に対して、「はい」「どちらでもない」「いいえ」の三つの回答を用意しそれを得点化した。すなわち、プラスの自己評価の質問は「はい」を3点、「どちらでもない」を2点、「いいえ」を1点とし、逆にマイナスの自己評価の質問はそれぞれ1点、2点、3点とし全項目の合計得点を出した。さらにその得点分布にしたがって25%ずつ4分割し、「高」「中高」「中低」「低」の4グループにまとめたものである。
- 10) 李 1985 194頁
- 11) 李 前掲書 193頁
- 12) Stuart Hall 1989 pp.70
- 13) Blau, Peter, M. 訳書 1978 181頁
- 14) Park, R.E. 折原 1969 59頁の訳による
- 15) 折原 1969 38頁

〈引用・参考文献〉

- Blau, Peter, M. 1955, Social Mobility and Interpersonal Relations : American Sociological Review, June, No.3 Vol.21. (仲村祥一訳「社会的移動と人間関係」鈴木広編 1978『都市化の社会学』増補版 誠信書房, 180-190頁)

- Fordham, Signithia. and Ogbu, John. U. 1986, Black Students' School Success : Coping with the "Burden of 'Acting White'" : Urban Review, 18(3), 176-206.
- DeVos, George A. 1981, Koreans in Japan : University of California Press. 1992, Social Cohesion and Alienation, Minorities in the United States and Japan : Westview Press.
- DeVos, George A. Marcelo Suarez-Orozco 1990, Status Inequality, The Self in Culture : SAGE Publications.
- 李 光一 1985, 「現代社会とエスニシティ」『思想』4月号 岩波書店.
- Lewin, Kurt 1935, "Psycho-Sociological Problems of Minority Group, " Character and personality pp175-187. (末永俊郎訳 1954 『社会的葛藤の解決』東京創元社 190-207頁)
- 大阪人権研究会・大阪市外国人教育研究協議会 1991, 『子どもの教育環境についてのアンケート調査報告書—大阪市内における在日韓国・朝鮮人児童・生徒を中心として—』.
- 折原 浩 1969, 『危機における人間と学問』 未来社.
- Park, R.E. 1950, Human Migration and Marginal Man in Race and Culture: The Free Press. New York.
- 泉南市教育委員会 1993 『泉南市 学力・生活総合実態調査報告書』
- Stuart Hall 1986, Gramsci's Relevance for the Study of Race and Ethnicity : Journal of Communication Inquiry 10 (Summer).
- Stuart Hall 1988, The Road in Garden : Thatcherism among the Theories, Marxism and the Interpretation of Culture : University of Illinois Press.
- Stuart Hall 1989, Ethnicity : Identity and Difference, Edited version of a speech delivered at Hampshire College.
- Stuart Hall 1992, The Question of Cultural Identity, Modernity and Its Future : Policy Press in association with Bloakwell Publication.
- 谷 富夫 1992, 「エスニック・コミュニティの生態研究」 鈴木広編著 1992『現代都市を解読する』ミネルヴァ書房, 260-283頁
- 谷 富夫 1993, 「都市国際化と『民族関係』」今津孝次郎・中野秀一郎編『エスニシティの社会学』 世界思想社 1993 2-25頁.

A Study of Ethnic Identity Formation: Diversity Among Japanese Koreans

Taeyoung KIM

This paper is based on survey data and participant-observation of Japanese Koreans in the Kansai Region, and compares the conditions in which the ethnic identity of Japanese Koreans differs according to correlations that were found between area of residence and self and group concepts regarding assimilation. The ethnic identity of Japanese Koreans, according to I Kuanil, "is based on the view that they have distinct uniqueness." This viewpoint clearly "takes as its standard an objectivist view of group characteristics held in common by its members." : "common ancestry" , "unified cultur", etc. This view is prevalent because there are a great number of Japanese Koreans living in some concentrated areas, and therefore the common view of ethnicity up till now could be called "concentrated population area ethnicity type." However, this way of thinking has been established by the view that ethnicity is "original and given." Therefore, for Japanese Koreans, their "existential origin is ambiguous" and this has resulted in their negative perception of this marginal status. Yet, it is difficult for them to find a positive reason for their existence as "residents." The conditions of the people in the concentrated population areas contrast with the conditions of Japanese Koreans who live in dispersed places away from such areas. In many cases, the latter people live rather invisibly within Japanese society by "passing" themselves off as Japanese. This can be taken as a result of their apparent assimilation into Japanese society. This "assimilation" has been viewed negatively valuation by those who have not been assimilated. However, when one directly interacts with "assimilated" Japanese Koreans, one finds that their situation is not so clear-cut as the prevailing assumption may lead one to believe. The ethnic identity that Japanese Koreans are daily made aware of within Japanese society carries with it various unsettled conflicts for them, and these internal conflicts are multidimensional. Whereas mostly negative evaluation have been made so far, this multidimensionality has the potential to effect the development of a new ethnicity or a new identity for Japanese Koreans.